



TITLE:

# 表現環の構造について (有限群の群環と表現論)

AUTHOR(S):

岩田, 恵司

---

CITATION:

岩田, 恵司. 表現環の構造について (有限群の群環と表現論). 数理解析研究所講究録 1971, 111: 35-46

ISSUE DATE:

1971-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/106383>

RIGHT:

## 表現環の構造について

東京教育大学大学院 岩田恵司

$G$  を有限群とし  $R$  を Dedekind domain とする。以後  $RG$ -加群については  $R$ -加群として有限生成, torsion free なものだけを扱う。 $RG$ -加群  $M, N$  について,  $M \otimes_R N$  は  $G$  の作用を  $g(m \otimes n) = gm \otimes gn$ ,  $g \in G, m \in M, n \in N$  とすることにより  $RG$ -加群になる, これを  $M \otimes N$  と書く。 $RG$ -加群の同型類を  $[\ ]$  を付して表わす。いま  $RG$ -加群の同型類を生成元とし, 基本関係  $[M] = [M'] + [M''] \mid M \cong M' \oplus M''$  で定義される  $\mathcal{P}$ -グループは 更に  $[M][N] = [M \otimes N]$  と定義することにより環の構造をもつ, これを群  $G$  の ( $R$ 上の) 表現環といい  $a(RG)$  で表わす。 $\mathbb{C}$ -algebra  $\mathbb{C} \otimes a(RG)$  を  $A(RG)$  で表わす。表現環の構造については Lam, Green, Conlon, 等によりいくつかの結果が得られているが, それらの概略をここに紹介する。

## § 1

本節を通して,  $R$  は complete discrete valuation ring とし,  $P$  をその極大イデアル.  $\bar{R} = R/P$ ,  $p = \text{char } \bar{R}$ , とする.  
 $G$  の部分群  $H, K$  について, もし  $x^{-1}Kx \subseteq H$  ( $\exists x \in G$ ) ならば, このとき  $K \leq H$  と表わす.  $RH$ -加群  $L$  に対して  $RG$ -加群  $RG \otimes_{RH} L$  を  $L^G$  で表わすことにする.

定義  $G$  の部分群  $D$  について,  $M \in L^G$ ,  $L: RD\text{-module}$ , なる様な  $[M]$  で生成される  $A(RG)$  の加法的部分群は, 更に  $A(RG)$  のイデアルになる, これを  $A_D(RG)$  で表わし,  
 環  $A_D(RG) / \sum_{H < D} A_H(RG)$  を  $W_D(RG)$  で表わす. 又それらを複素数で係数拡大したものをそれぞれ  $A_D(RG)$ ,  $W_D(RG)$  とする.

定理 [1] (Green [2])

$$W_D(RG) \cong W_D(RN(D)) : \text{ring isomorphic}$$

(ここで  $N(D)$  は  $D$  の  $G$  における正規化群)

証明は省略するが, この同型対応は  $t([M]) = [M^G]$  で定義される transfer map,  $t: A(RN(D)) \rightarrow A(RG)$  から自然に誘導された対応で与えられる.

注意.  $D$  が  $p$ -部分群でない場合は  $W_D(RG) = 0$

補題 [2]

$F([M]) = [\bar{R}G \otimes_R M]$  により,  $\tau$  定義される自然同型  
 $F: A(RG) \rightarrow A(\bar{R}G)$  を考える。  $\{[X] - [X'] - [X''] \mid \exists 0 \rightarrow X' \rightarrow X \rightarrow X'' \rightarrow 0$   
 $\bar{R}G$ -exact sequence  $\}$   $\tau$  生成される  $A(\bar{R}G)$  のイデアル  $\in$   
 $A'(\bar{R}G)$  とし,  $A'(RG) = F^{-1}(A'(\bar{R}G))$  とするとき

$$A(RG) = A_{(0)}(RG) \oplus A''(RG)$$

とイデアル分解される。

証明 作りより  $A_{(0)}(\bar{R}G) \cdot A''(\bar{R}G) = 0$  又  $A(RG)/A''(RG)$   
 $\simeq G_0(\bar{R}G) \simeq A_{(0)}(\bar{R}G) \simeq A_{(0)}(RG)$ 。 作りより  $A_{(0)}(RG) \cdot A''(RG) = 0$   
。準同型  $F^*: A(RG) \xrightarrow{F} A(\bar{R}G) \xrightarrow{\tau} G_0(\bar{R}G)$  は  $A_{(0)}(RG)$  の上での  
同型であることに注意すれば,  $\exists J_G \in A_{(0)}(RG)$  かつ  $F^*(J_G) = F^*(1_G)$   
, ことに  $1_G$  は  $A(RG)$  の単位元, について  $1_G = J_G + (1_G - J_G)$   
と直交冪等元への分解が得られる。 (Q.E.D.)

$H \triangleleft G$  とする。準同型  $G \rightarrow G/H$  は自然に環準同型  $\tau$ :  
 $A(RG/H) \rightarrow A(RG)$  を引き起こす。  $\tau(A_{(0)}(RG/H)) \subset A_H(RG)$   
である。そこで  $\tau(J_{G/H})$ , ( $J_{G/H}$  は  $A_{(0)}(RG/H)$  の idempotent  
generator), を互いに同じ記号  $J_{G/H}$  で表わすことにする。

補題 [3]

$J_{G/H}$  は  $A_H(RG)$  の idempotent generator である。

証明  $\bar{R}$  は代数的に閉じている, と仮定してよい。

証明には入る方に少し準備をしておく。 $\bar{R}$ が代数的に閉じているから、 $G$ の representation group  $\hat{G}$  が存在して、 $G$ の上のすべての twisted group algebra は  $\bar{R}\hat{G}$  の両側イデアルとして実現される。そこで、この分解を

$$\bar{R}\hat{G} = B_0 \oplus \cdots \oplus B_n, \quad B_0 = \bar{R}G$$

とすると、これにより、 $\mathbb{C}$ -space への分解

$$A(\bar{R}\hat{G}) = A(B_0) \oplus \cdots \oplus A(B_n)$$

$$A_{(1)}(\bar{R}\hat{G}) = A_{(1)}(B_0) \oplus \cdots \oplus A_{(1)}(B_n)$$

$$A^{(1)}(\bar{R}\hat{G}) = A^{(1)}(B_0) \oplus \cdots \oplus A^{(1)}(B_n)$$

$$G_0(\bar{R}\hat{G}) = G_0(B_0) \oplus \cdots \oplus G_0(B_n)$$

が引き起こされる。又、 $\bar{R}\hat{G}$  の Cartan matrix は non-singular であることより  $\varphi_i: A_{(1)}(B_i) \xrightarrow{\sim} G_0(B_i): \mathbb{C}$ -isomorphic となる。 $B_0, B_i$ -加群  $M, N$  は自然に  $\bar{R}\hat{G}$ -加群とみられるが、 $\bar{R}\hat{G}$ -加群として  $M \otimes N$  を考えたと  $M \otimes N$  は  $B_i$ -加群である。これによつて  $A(B_0), A_{(1)}(B_0), G_0(B_0)$  は各々、

$A(\bar{R}\hat{G}), A_{(1)}(\bar{R}\hat{G}), G_0(\bar{R}\hat{G})$  の  $\mathbb{C}$ -sub-algebra になることが分る。かつ  $A_{(1)}(\bar{R}\hat{G}), A_{(1)}(\bar{R}\hat{G})$  の idempotent generator を

$$\text{それぞれ } J_G, J_{\hat{G}} \text{ とすると } J_{\hat{G}} = J_G \in A_{(1)}(B_0),$$

なることが分る、これより  $\sum J_G = 1, \forall x \in A_{(1)}(B_i),$  である。

absolutely indecomposable RH-加群  $L$  をとり

$L$  の  $G$  における *stabiliser*  $\varepsilon_S$ ,  $\{[M] \in A(RG) \mid M \mid L^G\}$  で生成された  $A_H(RG)$  の  $\mathbb{C}$ -subspace を  $A(L^G)$  とすると, 計算は省略するが,  $S_H$  の  $\bar{R}$  上の *twisted group algebra*  $B_L$  と  $\mathbb{C}$ -linear homomorphism  $F_L: A_H(RG) = \bigoplus_L A(L^G) \rightarrow A_{\omega}(B_L)$  が構成され, 次の条件を満足する。

$$F_L: A(L^G) \xrightarrow{\sim} A_{\omega}(B_L) : \mathbb{C}\text{-isomorphic.}$$

$$F_L(xy) = F_L(x) F_{\varepsilon_H}(y), \quad \forall x \in A_H(RG), \quad \forall y \in A_{\omega}(R/S_H)$$

従って  $\forall x \in A(L^G)$  について

$$\begin{aligned} F_L(x J_{S_H}) &= F_L(x) F_{\varepsilon_H}(J_{S_H}) \\ &= F_L(x) J_{S_H} \\ &= F_L(x) \end{aligned}$$

$$\text{故に } x J_{S_H} = x \quad (\text{Q.E.D.})$$

以上の結果にもとづいて次の定理が得られる。

定理 [4] (Conlon [3])

$G$  の部分群  $D$  について

$$A_D(RG) \triangleleft A(RG)$$

$$A_D(RG) = A'_D(RG) \oplus A''_D(RG), \quad A''_D(RG) \cong W_D(RG)$$

$$\therefore A'_D(RG) = \sum_{D' < D} A_{D'}(RG)$$

証明  $|D|=1$  のときは証明されている。  $|D|$  に関する帰納法で証明する。帰納法の仮定により  $A'_D(RG) \triangleleft A(RG)$  従って補題 [3] により  $D \nmid G$  の場合について証明すればよい。

$N(D) \subseteq G$  より  $A_D(R \cdot N(D))$  について同定理は成立。従って、

$$\begin{aligned} A_D(RG) / A'_D(RG) &= W_D(RG) \\ &= W_D(R \cdot N(D)) \\ &\cong A'_D(R \cdot N(D)) \oplus A(R \cdot N(D)) \end{aligned}$$

より  $A_D(RG) / A'_D(RG)$  は identity element を持つ。

(Q.E.D.)

## § 2

$R$  は § 1 と同じく complete discrete valuation ring とする。ここでは  $a(RG)$  の nilpotent element について調べる。  
 $D \triangleleft G$  とし、 $H \in D$  を含む  $G$  の部分群とする。

inclusion map  $i_H: H \hookrightarrow G$  は

$$\text{ring hom.} \quad i_H^*: G_0(R^{\%}) \longrightarrow G_0(R^{H\%})$$

$$I_H^*: a_D(RG) \longrightarrow a_D(RH)$$

$$\text{add. hom.} \quad i_{*H}: G_0(R^{H\%}) \longrightarrow G_0(R^{\%})$$

$$I_{*H}: a_D(RH) \longrightarrow a_D(RG)$$

を誘導する。 $a_D(RH)$  は  $[M] \cdot [S] = [M_H \otimes S]$ ,

$M: R^{H\%}$ -加群,  $S: D$ -projective  $RH$ -加群,  $M_H: M \in$

$H \rightarrow H\%$  を通して  $RH$ -加群としたもの, とする: と

によつて  $a(R^{H\%})$ -加群となるが, 更に  $G_0(R^{\%})$ -加群でもあることが分る。

補題 [5]

$\Delta = \{ \text{subgroup } H \text{ of } G \mid H \supset D, H/D \text{ cyclic} \}$  とする。  
とき。もし  $\Delta \ni \forall H$  に対して  $a_D(RH)$  が 0 以外の nilpotent element をもたないならば、 $a_D(RG)$  も持たない。

証明  $X^n = 0$ ,  $X \in a_D(RG)$  とすると、 $\forall H \in \Delta$  に対して  
 $0 = I_H^*(X^n) = I_H^*(X)^n \in a_D(RH)$ 。従って  
 $X \in \bigcap_{H \in \Delta} \ker I_H^*$ 。さて、

$$[G:D]^2 G_0(RG/D) \subset \sum_{H \in \Delta} \text{image } i_{*H}$$

であることに注意すれば

$$\begin{aligned} [G:D]^2 X &= [G:D]^2 \cdot 1_{G/D} \cdot X, \quad 1_{G/D}: G_0(RG/D) \text{ の単位元} \\ &= \sum_{H_j \in \Delta} a_j i_{*H_j}(y_j) X \\ &\quad \exists H_j \in \Delta, \exists y_j \in G_0(R \cdot H_j/D) \\ &\quad \exists a_j: \text{integer} \\ &= \sum a_j I_{*H_j}(y_j I_{H_j}^*(X)) \\ &= 0 \end{aligned}$$

従って  $X = 0$ 。

(Q.E.D.)

定理 [6] (Lam [5])

次の条件を満足する  $G$  の部分群  $H$  の存在を成る集合を  
とすると、 $H^{(p)} \triangleleft H$ ,  $H/H^{(p)}$ : cyclic

すなわち  $H^{(p)}$ :  $p$ -Sylow subgroup of  $H$



もし  $\forall H$  に対して  $a(RH)$  が 0 以外の nilpotent element をもたないならば,  $a(RG)$  は non-zero nil. el. を持たない。

証明  $|G|=1$  のときは明らか。  $|G|$  に沿って帰納法で証明する。  $D \in G$  の任意の  $p$ -部分群とする。もし  $D \neq G$  ならば帰納法の仮定により  $a(R \cdot N(D))$  は non-zero nil. ele. を持たない, 従って  $\omega_D(RG) (\cong \omega_D(R \cdot N(D)))$  も non-zero nil. ele. をもたない。  $D \triangleleft G$  の場合は  $\forall H \in \Delta$  とすると  $D < H^{(p)} < H$ ,  $H$  は cyclic, 従って  $H \in \Sigma$  となり  $a(RH)$  は non-zero nil. ele. をもたない。従って補題により,  $a_D(RG)$  故に  $\omega_D(RG)$  も non-zero nil. ele. を持たない。従って定理 [4] により示された。 (Q.E.D.)

### § 3

本節では Burnside algebra の分解から誘導された, 表現環のイデアル分解を紹介する。

定義.  $RG$ -加群の category を  $\mathcal{M}(RG)$  とし

$\mathcal{L} = \bigcup_{D \leq G} \mathcal{M}(RD)$  とする。  $M$  が  $RD$ -加群であることを  $T_M = D$  と書くことにする。  $\mathcal{L}$  上の  $M, M'$  について  $M \cong {}^x M'$   $\exists x \in G$  のとき  $M \sim M'$  と書き, 関係  $\sim$  による  $M$  の class を  $\langle M \rangle$  で表わす。  $\langle M \rangle; M \in \mathcal{L}$  で生成された free abelian group は, 生成元の間の積を

$$\langle M \rangle \langle N \rangle = \sum_x \langle M_{T_H \cap T_N} \otimes {}^x N_{T_H \cap T_N} \rangle$$

$x$  は  $G$  の  $(T_H, T_N)$ -両側剰余類の代表系を動く

と定義する: ことにより環になる, これを Burnside ring と

いい  $b(RG)$  で表わす。  $B(RG) = \mathbb{C} \otimes b(RG)$  とする。

$G$  の部分群  $H$  について  $\{ \langle M \rangle \mid T_H \leq H \}$ ,  $\{ \langle M \rangle \mid T_H \not\leq H \}$

で生成される  $b(RG)$  の additive subgroup をそれぞれ

$b_H(RG)$ ,  $b'_H(RG)$  とすると, これは  $b(RG)$  のイデール

である: と分かる。  $B_H(RG) = \mathbb{C} \otimes b_H(RG)$ ,  $B'_H(RG) = \mathbb{C} \otimes b'_H(RG)$

とする。

定理 [7] (Conlon [4])

$$b_D(RG)/b'_D(RG) \xrightarrow{\sim} b_D(R \cdot N(D))/b'_D(R \cdot N(D))$$

: ring isomorphism

証明  $b_D(RG) \rightarrow b_D(R \cdot N(D))$  から誘導された additive hom.  $\gamma^*: b_D(RG)/b'_D(RG) \rightarrow b_D(R \cdot N(D))/b'_D(R \cdot N(D))$  について,

$\gamma^*$  は base を base に対応させているから additive isom.

(かも  $M, M' \in ML(R \cdot D)$  について

$$\langle M \rangle \langle M' \rangle = \sum_{D \times D \subset G} \langle M' \otimes {}^x M \rangle$$

$$\equiv \sum_{D \times D \subset N(D)} \langle M' \otimes {}^x M \rangle \pmod{b'_D(RG)}$$

従って  $\gamma^*$ : ring isomorphism

(Q.E.D.)

$M \in \mathbb{L}$  とするとき,  $T_M = S$ ,  $V_S = [N(S), S]$  とおくと,

$$\begin{aligned} \langle I_S \rangle \langle M \rangle &= \sum_{S \cap S' \subset G} \langle I_S \otimes^x M \rangle \\ &\equiv \sum_{S \cap S' \subset N(S)} \langle I_S \otimes M \rangle \pmod{l'_p(RG)} \\ &\equiv V_S \langle M \rangle \pmod{l'_p(RG)} \end{aligned}$$

これに注意して  $|D|$  に沿う帰納法によりこの定理が証明される。

定理 [8] (Conlon [4])

$B_D(RG)$  は  $B(RG)$  のイデアル因子である。

特に Burnside alg. は  
 $B_D(RG) = B'_D(RG) \oplus B''_D(RG)$ ,  $B''_D(RG) \cong B_D(RG) / B'_D(RG)$   
 $B(RG) = \bigoplus_{D \leq G} B'_D(RG)$ ,  $B'_D(RG) \cong B_D(RG) / B'_D(RG)$   
 とイデアル分解される。

(証明略)

いよいよ自然に algebra epimorphism  $\psi: B(RG) \rightarrow A(RG)$   
 $\langle M \rangle \mapsto [M^G]$   
 が構成されるが、 $\psi$  は

$A_D^*(RG) = \psi(B_D(RG))$ ,  $A_D^*(RG) = \psi(B'_D(RG))$  とおく。

このとき次が成立する。

定理 [9] (Conlon [4])

$$A_D^*(RG) = A_D^{*'}(RG) \oplus A_D^{*''}(RG)$$

$$A_D^*(RG) \oplus A_D^{*''}(RG) \cong A_D^*(RG) / A_D^{*'}(RG) \cong A_D^*(R \cdot N(D)) / A_D^*(R \cdot N(D))$$

特に  $A(RG) = \bigoplus_{D \leq G} A_D^*(RG)$

証明

$\langle M \rangle = \langle M' \rangle = \langle M'' \rangle$  ;  $T_M = T_{M'} = T_{M''}$ ,  $M \cong M' \oplus M''$ ,  $\langle N \rangle = \langle N^p \rangle$

で生成された  $L(RG)$  の additive subgroup は ideal に

なる,  $\therefore$   $\psi \in J(RG)$  で表わすと  $\text{Ker } \psi = \mathbb{C} \otimes J(RG)$  で

あることが分る。  $\mathbb{C} \otimes J(RG) \cap B_D(RG)$  の生成元を  $\text{mod } B'_D(RG)$

で考えると  $\langle M \rangle = \langle M' \rangle = \langle M'' \rangle$ ,  $\langle N^p \rangle$ ,  $\therefore$   $T_M = T_{M'} = T_{M''} = D$ ,  $M \cong M' \oplus M''$ ,  $T_N \leq D$ ,  $\therefore$  ある, 全

く同じ元が  $\text{mod } B'_D(R \cdot N(D))$  での  $\mathbb{C} \otimes J(R \cdot N(D)) \cap B_D(R \cdot N(D))$  の生成元である。従って定理 [7] [8] により示された。

(Q.E.D.)

## 文 献

- [1] C. W. Curtis and I. Reiner ; Representation theory of finite groups and associative algebras ( Interscience 1962 )
- [2] J. A. Green ; A transfer theorem for modular representations ( J. of Alg. 1 (1964) )
- [3] S. B. Conlon ; Relative components of Representations ( J. Alg. 8 (1968) )
- [4] S. B. Conlon ; Decompositions induced from the Burnside algebra ( J. Alg. 10 (1968) )
- [5] T. Y. Lam ; A theorem on Green's modular representation ( J. Alg. (1970) )